

2025年2月9日顕現後第5主日

イザヤ書6章1-8節、《9-13節》
コリントの信徒への手紙一 15章1-11節
ルカによる福音書5章1-11節

昨日は、教会でご葬儀がありました。長い間わたしたちの教会をささえてくださった、信仰の先輩を天国にお送りいたしました。この地上での別れの悲しみは、簡単には癒されませんが、天国での再会をまことの希望としたいと思います。

本日の旧約日課は、以前の士師記にあるギデオンへの召命のお話から、新しい聖書日課のイザヤ書にある預言者イザヤの召命の個所になりました。「その時、私は主の声を聞いた。『誰を遣わそうか。誰が私たちのために行ってくれるだろうか。』私は言った。『ここに私がおります。私を遣わしてください。』」（イザヤ6:8）という召命のやり取りは有名です。使徒書は、パウロの召命の個所ではありませんが、パウロの召命について間接的に語っていると言えます。パウロは、十字架前のイエス様に会ったことはありませんが、復活されたイエス様に出会って、回心したからです。本日の個所にあります「そして最後に、月足らずで生まれたような私にまで現れました。私は、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中では最も小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です」（一コリ15:8-9）は、そのことを告げています。

本日の福音書も召命のお話、シモン・ペトロの召命のお話です。マルコ福音書とそれに準じたであろうマタイ福音書の非常に短い、理由のない召命のお話と比較すると、ルカ福音書のペトロの召命のお話は長くまた劇的です。マルコの召命では、イエス様が見て、「私に付いて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」（マルコ1:17）と招くだけですが、ルカの召命ではイエス様がまずペトロに、「沖へ漕ぎ出し、網を降ろして漁をきなさい」と言われます。人間をとる漁師どころか、漁師に漁をきなさいと命じるのです。2節で「イエスは、二艘の舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた」とある通り、イエス様は、その日の漁が終わっていたことを知っていました。それでも沖に出なさいと命じたのでした。それゆえでしょうか、ペトロは、「先生、私たちは夜通し働きましたが、何も捕れませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えます（ルカ5:5）。

この「お言葉ですから」という部分の「言葉」は、ルカの物語ですでに語られている、「イエスはガリラヤの町カファルナウムに下って、安息日には人々を教えておられた。人々はその教えに驚いた。その言葉に権威があったからである」（ルカ4:31-32）とある「権威ある言葉」や、本日の個所の導入にある「群衆が神の言葉を聞こうとして押し寄せて来たとき、イエスはゲネサレト湖のほとりに立っておられた」（ルカ5:1）とある「神の言葉」の「言葉」とは、単語が異なります。内容というよりも「発話」そのものを意味する単語の「言葉」です。

「お言葉ですから」を意地悪く意識をすれば「権威ある先生がそう言われましたので、だめだとは思いますが」というぐらいになります。ペトロが、イエス様の語ることに、何かがあることをうわさで知っていたことは確かでしょう。しかし、漁に関しては、自分たちの方が詳しいという自負もあったのででしょう。

お話は、ペトロの予想・思いを超えた展開となります。イエス様の指示の通りに漁をすると、二艘の船が沈みそうになるほど大漁になるからです。そうすると「**これを見たシモン・ペトロは、イエスの膝元にひれ伏して、『主よ、私から離れてください。私は罪深い人間です』と言った**」(ルカ 5:8)とお話が展開します。ここで大切なのは、弟子の召命であっても、自分の罪を自覚する悔い改めが大切だということです。これはルカ福音書の特徴です。

ルカ福音書にあるペトロの召命のお話には、このようにペトロがイエス様に従い始めるはっきりとした理由があります。奇跡的な大漁という地上の事柄です。しかし、大切なのは、それを見て自分の常識的判断を改めるという転換です。ペトロが大漁を可能にしたイエス様の力だけを見ての判断した可能性もあります。そうだとすると、「**そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った**」(ルカ 5:11)とある通り、彼は他の仲間と一緒に、イエス様の弟子となりました。見方を変えれば、イエス様は、ペトロに一番分かりやすい方法で、招いたのです。

ルカ福音書にあるペトロの召命のお話は、最初の弟子であり後に代表となるようなペトロであっても、イエス様に出会って、今までの思いがすべて変わるような思い、「悔い改め」を通して、歩み始めたと言います。もちろん、十字架を前にして離散していますから、弟子としてしっかりと歩み始めたのは、イエス様が復活された後です。本日の使徒書は、間接的なパウロの召命の個所であると述べました。パウロは、コリントの教会へあてた手紙の中で、イエス様が復活されて、パウロに現れたからこそ、弟子となったと告げているのです。主イエスの復活を信じたからこそ始まった歩みでした。内容は異なるのですが、転換を起こさせたのは、イエス様のとの出会いでした。この単純な事柄は、教会が今日も存在する根拠と理由を示しています。教会は、イエス様が復活されたからこそ存在するのであり、復活のイエス様を示すからこそ存在するのです。

礼拝をはじめとしたすべての活動はこのことに関わっています。もちろん、わたしたちは、それぞれに賜物は与えられていますが、力あるイエス様のように、人間の常識を超えるような出来事を起こすはできません。しかし、そのような力がなくてもわたしたちにできることがあります。それは復活の信仰をしっかりと持つことです。昨日、葬儀がありましたが、「死」という事柄は、人間にとって必然の事柄です。すべての人は、必ず「死」を迎えます。その具体的な出来事に何を見出すのか、それが大切です。単なる終わりを見出すのか、それとも、地上での別れの悲しみを超えた、天国の再会の希望を見出すのか、もちろん、イエス様の復活を通した再開の希望を見出したいと思います。その希望に基づいた信仰をもち、これからも教会を通してイエス様を示していきたいと思います。